

一 はじめに

自然や人間が厳しい状況に置かれた際、いかにして自らを回復できるだろうか。また、自然及び環境は「誰のため」のものであり、「誰の視点」から見るべきものなのだろうか。人間以外の視点で世界をとらえたユクスキュルの著書『生物から見た世界』（岩波書店、二〇〇五年）は、今なお「他者理解」や「環境理解」について人々にその重要性をもたらし^{注1}。

今日世界を見渡せば戦争や紛争が絶えず、同じ人間同士でさえコミュニケーションの困難さを極めている。他者との共生関係が崩れることにより、与えられた豊かな地球環境も自ら破壊し続けている。それゆえに、今日の人間にとってとりわけ「回復する力」と「対話」が必要とされる。

本稿では将来の環境保護・保全活動において、自然や人々の精神の回復力と生き抜くためのしなやかさに関連するレジリエンスの概念を提示する。また、環境における「対話」の意義を模索する。

このほか、木原文庫^{注2}の資料も扱う。最終的に現代の環境保護・保全において何が必要とされるのかという問いについて論じる。

二 環境におけるレジリエンス

アメリカ心理学会によると、レジリエンスとは「困難で挑戦的な人生経験に適應する過程や結果」のことである^{注3}。また、サウスウィックとチャーニー（二〇一五年）によると、「人に対してレジリエンスという言葉を使う場合は、困難な出来事の後には回復する能力があるということを示す」と定義されている^{注4}。

三 対話と共生

レジリエンスと同時に、自然を含む他者との対話も共生社会を構築する上で重要である。自然及び歴史的環境保護・保全運動や人々の住環境での対立における最大かつ根本的課題の一つとして、「早期の段階での対話不足」が挙げられる。換言するならば、本質的なコミュニケーションの不十分さといえる。本項では、金子晴勇『対話と共生思想』（知泉書館、二〇二三年）の考察を参照し、対話の

重要性を三点にまとめる。

第一に、手段としての対話はモノローグ（独語）的対話であり、対話を崩壊させるものは、対話への無知と精神的未成熟であるとされる点である（金子、二〇二三年、vi-viii頁）。つまり、現代の人々は自己中心主義となり、実際は対話ではなく、互いがモノローグを述べているにすぎないことを意味する。

第二に、対話における向き合い方である。金子（二〇二三年）は、対話について他者と向き合う「対向」と他者を無視して自己自身に向く「偏向」を挙げ、対話の本質は前者であると説く（金子、二〇二三年、四〇―四五頁）。

第三に、第二に関連する対話における「相互性」や聞く態度の重要性である（金子、二〇二三年、四五、七五頁）。

さらに、自然との対話も聞く姿勢が重要であり、古代の人々の動植物に対する姿勢が今日も田舎に生き続けていると言及されている（金子、二〇二三年、一五、四一頁）。

従って、先に挙げた三点が満たされた対話こそ、自然と人間の共

生の実現を生み出し、今日の環境保護・保全において早急に対策すべき事柄なのである。

また、対話における「他者と共感する心の作用は人間の心のうちでもっとも繊細で感じやすい、しなやかな部分」(金子、二〇二三年、七九頁)であることから、レジリエンスにも通じる要素である。

四・木原文庫資料… 『我が国における国民環境 基金運動の展開の方向』 (環境庁自然保護局、 一九八三年)^(注5)

英国の環境保護団体ナショナル・トラスト(以下、英国NTとする)は、先述のレジリエンスや対向的対話に通じる姿勢をもち、理想実現の環境保護・保全に貢献する団体の一つと言っても過言ではない。本資料は図表も含まれており、環境庁自然保護局が発行した報告書である。この文書は、中間とりまとめ(素案)も残されている。従って、最終的に資料が完成するまでの過程も検証することができる。素案や製本版には書き込みや下線が多数あり、当時よく活用された形跡がみられる。

この報告書の主な内容をまとめると以下の通りである。

はじめに英国NT、オーストラリアとニュージーランドのNT及びアメリカにおけるNTと類似する団体の概要が記載されている。次に日本におけるNTの現状、特徴及び問題点、英国型NTの日本への導入の可能性について述べられている。最後に日本の国民環境基金運動発展における方向がまとめられている。^(注6)

この資料において特筆すべき点は、英国型NTの日本への導入の可能性の検討及び運動発展の方向性の考察を確認できることである。

五・おわりに

「何事も過度であつてはならない」^(注7)—偉大な哲学者の一人であるデジデリウス・エラスムス(Desiderius Erasmus、一四六九—一五三六年)が述べた言葉は、環境と人間の未来に警鐘を鳴らす。物事にはバランスが大切である。経済や開発の発展が重要であると同時に、人間の倫理観や精神的豊かさを育成することも必要不可欠なことである。

また、かつてないほど気候、社会や人間が劇的な変化を遂げる中、困難な状況に直面しても適応できるしなやかさと相手との共感をもった対話の修練には、美しく豊かな自然環境が必要である。つまり持続可能な社会を築くためにレジリエンスや健全な対話を生み出す環境が、日本の自然やナショナル・トラストの中にあることを我々は忘れてはならない。

自然との対話—おそらく人類にとって最大の課題とされる他者との対向的対話の実現を目指し、「善く生きる」という意識を忘れないことが求められているといえるよう。

注1…ユクスキュル「生物から見た世界」七頁。同頁では、「人間をも機械化」にも触れられている。

注2…【木原文庫】江戸川大学国立公園研究所では、日本にナショナルトラスト運動やアメニティ概念を紹介した人の一人として有名な、故木原啓吉先生の蔵書や資料木原文庫の分類・整理を進めている。木原先生は江戸川大学名誉教授であり、環境情報学科現代社会科学科の過去の学科名の初代学科長でもある。国立公園研究所ウェブサイト: https://www.edogawa-u.ac.jp/facility/park_research/library.html アクセス日:二〇二五年八月三日

注3: American Psychological Association (アメリカ心理学会) "Resilience" URL: <https://www.apa.org/topics/resilience> アクセス日:二〇二五年八月三〇日

注4…ステイブン・M・サウスウィック、デニス・S・チャーニー「レジリエンス: 人生の危機を乗り越えるための科学と一〇の処方箋」森下愛訳、西大輔、森下博文監訳(岩崎学術出版社、二〇一五年)二六頁。

注5…この資料では、ナショナル・トラスト運動とそれに類似する運動を国民環境基金運動と表記している。

注6…この他にもくじには、「国民環境基金運動をめぐる我が国の条件」「自然環境の保全における国民環境基金運動への期待」及び「国民環境基金運動の基本原則」の項目がある。

注7…エラスムス「格言選集」金子晴勇編訳(知泉書館、二〇一五年)、七四七七頁参照。

木村 美里●きむら みさと

聖学院大学基礎総合教育部特任講師。博士(学術)。学習支援部署ラーニングセンターにて英語やアカデミックスキルズを教えるとともに、研究では英国ナショナル・トラストの創設者オクタヴィア・ヒルの思想を後世へ伝える活動を行っている。